
初恋

ユーギアル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋

【Nコード】

N3040N

【作者名】

ユージアル

【あらすじ】

眠らない町、神室町

様々な人間が行き来するこの場所で
1つのドラマが始まった

「俺は雅美が好きや」

東城会直系真島組、組長

真島吾朗

×

「私は汚れてるから・・・」

過酷な現実と向き合い今を必死に生きる

主人公、雅美

「雅美がおらんとあかんねん」

「真島さん、私実は・・・」

極道者と一般人

決して交わることのない2人が
手探りで愛を探し

人並みの幸せを

手にすることが出来るのか

出会い

——ここは東京神室町。

通りのそびえ立つアーケードの明るさが眠らない夜の町を煌々と照らしている。

明日は週末のせいか通りには一際人間多く、まるで眩しいぐらいの光を求める虫の様に神室町へどんどん怪しい歓楽街に吸い込まれていく。

ネオンが当たり前のように輝き、
町を行き交う人の分だけ出会いと別れがある。

その一時に誰もが酔いしれ、現実離れたこの世界にどっぷりとはまり、まるで夢心地のような錯覚さえ起こしてしまうだろう。

そして今宵もこの町のどこかで人間同士が織り成すドラマが生まれているに違いない——……

「ありがとうございました」

店の扉が開くとからんからんとベルが店内に鳴り響き、
客の出入りを知らせる。

ここはメイン通りから程近い喫茶アルプス。

店内には数人の客がいて食事をしながら個々の時間を過ごしていた。一人の客が店を出て行つたと入れ代わりに二人組の客が店内に足を踏み入れる。

「いらっしやいませ……」

そこで働くウェイトレス姿の雅美が扉の方向へ向くと思わず体の動きがぴたりと止まった。

「雅美ちゃん。お勤めご苦労様さ〜ん」

満面の笑みで雅美に向かって手を振る人物と、その横で呆れた顔をしてため息をつく人物。

その姿からはどう足掻いても一般市民には思えない服装と怪しいオーラを醸し出していて、店内にいた客全てがその二人組にくぎづけだった。

扉が程近い場所にいた雅美が二人を空いてる席に案内すると、左に眼帯をし大阪弁を話す男性が堪忍してな〜と言って笑いながら席に腰を下ろした。

「桐生ちゃんがどうしても来たい言うからさ〜」

「兄さんが無理矢理誘ったんじゃないですか……」

互いに向かい合わせに座った桐生が男性から目をそらし、

俯きながら陰口をぼそりと呟くと、テーブルの下でドンッ!と鈍い音が聞こえてきた。

「――いっ!」

「何言てんねん桐生ちゃん。こいつの言った事は気にせんといenaあ」

「はあ……」

桐生の顔色が真っ青になって体を丸めながら足元に手を伸ばしている。

その姿と兄さんと呼ばれた人物の屈託の無い笑みを見た雅美の顔が自然と引き攣っていた。

雅美はこのアルプスで正社員として働いて、もう三年になる。

日々目まぐるしく変わる神室町に種族様々な人間がいる事はもちろん知っているつもりだ。

この二人が自分とは違う裏社会で生きているという事も。

それに……。

「今日も雅美ちゃんは可愛いなあ」

この眼帯人間に何故か気に入れられてるということも。

「なあなあ、今日仕事何時に終わるん！？終わったら飯でも行こうや」

「何時に終わるかわからないから無理ですっ！」

二人がオーダーしたメニューを伝票に書きながら、雅美は速答した。

「いつになったら俺の誘い乗ってくれんねん」

雅美の素っ気ない態度に人物はガツカリ肩を落とす。

そんな姿を見ていた桐生がまあまあと言って宥める。

「真島組の組長がこんな姿なんて、組員が見たらどんなどう……」

そう言いかけた瞬間、

再びあの鈍い音がテーブルの下から聞こえてきた。

「…両足は…、キツイ……ッ」

桐生が苦渋な表情をしながら途切れ途切れで声を上げる。

その痛々しい桐生に雅美はつい同情をしつつも、テーブル席から離れ厨房へ足を向けた。

「今日も来てるの？あのヤクザ。雅美も変な人達に絡まれて大変よねえ」

「はあ……」

年配の女性従業員に声をかけられ雅美は思わず 苦笑いしてしまう。

「特に眼帯の人、毎日店に通ってるじゃない？ここはキャバクラじゃないつつうの」

女性は眉間にシワを寄せ、真島を遠くから冷たい目で眺めながら愚痴を零す。

「雅美ちゃんも迷惑なら迷惑って言った方が身のためよお？ヤクザとつるんだって、良いことなんてあるわけないんだらさ」

雅美は厨房にメニューを伝えると、ちらりと横目で真島と桐生を眺めた。

真島達と話すようになったのは、つい数ヶ月前の事だった。

桐生は度々店を利用していたので顔馴染みだったが、真島と連れで訪れた時、何故か真島から馴れ馴れしく話し掛けてきた。

店に来る度に、顔から火が出そうな言葉を何の躊躇いもなく話せるのはきつと関西のノリってやつなんだろう。

それに同じような言葉を他の女性にも言っているに違いない。

生まれてこのかた26年間、男性経験のない雅美にとってそういう軽々しい男性は恋愛対象外。

いや、寧ろ女性の敵なのかもしれない。

「8番テーブル」

その時、厨房から出来立てのナポリタンとホットコーヒーが用意された。

雅美はトレーにそれらのメニューを乗せると再び真島達のテーブルへ向かった。

「お待たせしました。こちらホットコーヒーでございます」

桐生の前にコーヒークップを差し出しテーブルに置くと、ありがとうとほんの少しだけ口端を緩めて桐生が言った。

短髪の髪顎髭を生やし、スーツを着崩れしたスタイルの桐生。

顔も端正な顔立ちなので女性からはモテるに違いない。

桐生の言葉に雅美は笑みで返事すると、今度は真島の前にナポリタンでございます一言付け加えて皿をテーブルに置いた。

「めっちゃ腹へってんねん。ええ香りやなあ」

某お笑い芸人によく似たテクノカット。

左目に蛇の模様がついた眼帯をし、首元には金のネックレス。

革の両手袋をして蛇柄のジャケットを素肌から羽織っており、その胸には鮮やかな入れ墨が彫られている。

どっからどうみてもソッチ系の人間にしか見えないで立ちだ。

「んー、しかし雅美ちゃんが作るナポリタンはいつ食うても美味しいなあ」

私がつったんじゃないんですけど……。

と心の内で呟きながらも、美味しそうに頬張る真島をじっと見つめる雅美。

その時突然携帯の着信音が店内に鳴り響き、その矛先を見ると真島の周辺から聞こえてくるのがわかった。

「兄さん、電話鳴ってますよ」

「今雅美ちゃんの手料理食べてねん。これ以上に大切な用件があるか」

あまりにも強引過ぎる言葉に、桐生は呆れ顔。

だが着信は鳴り続け止まる様子も見受けられない。

「あの…、回りのお客様に迷惑かかるんで……」

回りの客の冷たい視線に耐え兼ねた雅美が申し訳なさそうに真島へ伝えると、雅美をじっと見つめ口に含んだナポリタンを喉を鳴らし

て飲み干した。

「雅美ちゃんが言うならしゃないかあ……」

真島は手に持っていたフォークを携帯に持ち替えて、漸く着信を少々取った。

その瞬間――！

「ただ今真島は睡眠中なので電話に出れません」

その理不尽過ぎる言い訳に雅美と桐生は呆然としながら、真島は電話を切り何食わぬ顔で電源を落とした。

「さて、邪魔物はおらんくなったし食べる事に集中するかっ」

「電話いいんですか……？」

「かまへんかまへん！ どうせしょうもない事やろうし。携帯なんてあって無いようなもんや」

桐生の問いかけにアハハと笑いながら答えた真島は、再びフォークを手に取ってナポリタンを食べ始める。

かなり横暴な真島の様子に瞬きすら忘れて凝視していた雅美に、桐生が迷惑かけて悪かったなと詫びを入れた。

「あっ、大丈夫ですから」

その声に我に返った雅美は笑って桐生に返事する。

そして再び真島に視線を戻した。

——この人、本当にヤクザなの？

まるで子供がそのままでかくなったような感じで、見た目と中身がどうしても一致しない。

もちろん自分の知らない真島の顔はたくさんあるわけで、ここでいつも絡んでくるその姿しか見たことない。

この人がどんな生活を送って、

どんな生き方をしてるかなんて全く想像した事ないのだから。

「あゝ食った食った！ごっちそうさま」

皿の上にてんこ盛りにあったナポリタンが綺麗に、そしてあつという間に無くなっている。

満腹でご機嫌になった真島は、すぐ近くにあった箱から爪楊枝を一本取って歯先に差し込んだ。

「食べるの早いですね…、相変わらず」

その食べる速さは何度も目撃している雅美。

いや、食べるというより飲み込んでいるのほうが性にあってるかもしれない。

「だって雅美ちゃんがおんのに待たせたらあかんやんか。今しか話出来へんからなあ」

「って、私仕事なんですよ……?」

苦笑いした雅美と頭を抱えた桐生をよそに、真島は再びマシンガントークで口説きにかかっていた。

夜、時計の短い針が真上を差した頃雅美は漸く仕事を終え店を出ることが出来た。

通りは相変わらずの賑やかさで四方八方から話し声が聞こえてくる。

空には月が浮かびよく目を凝らすとにオリオン座が確認出来た。

12月の忙しい師走の時期でもこの町は全く変わらない姿がある。

時期にクリスマスが近づいているせいか、通りの至る所にサンタが出没していた。

店の看板を持つサンタや、今にでもパンツが見えそうぐらい短いスカートを履いた女の子のサンタ。

きっと子供が見たら間違いなくサンタの存在が別の物に変わってしまっただろう。

雅美はそんな華やかな通りに背を向けて、北風吹く神室町を歩き始めた。

雅美の家は神室町から程近い所にあり、今は親戚夫婦と暮らしていた。

幼少時代に両親を火事で無くし、それ以来ずっと面倒を見てくれて

いる。

だが、正直昔からあの家が嫌いだった。

いや、家と言うより親戚夫婦が嫌だったのだ。

火事で亡くなった両親の変わりに忽然と雅美の前に現れて、自分の家においてと手を差し出してくれた。

天涯孤独になった自分を引き取って面倒を見てくれるとまで言ってくれた時は嬉しかったし、

両親の分まで生きて行かないと子供ながらに感じていた。

それに叔父叔母は優しく接してくれて、辛い過去を乗り越えられるかもしれないと、心から二人を信頼していたのに……。

幸せは長くは続かなかった。

中学生になった途端叔母の態度ががらりと変わり、昔のような優しい言葉も罵声に変わってしまった。

“住ませてやってるんだから掃除ぐらいしろ！”

“気軽に声をかけるな、この野良猫！”

雅美を人間以下で見るような見下した目線が嫌で、次第に自分の部屋に閉じこもるようになる。

そんな時叔父が心の傷に塩を塗るような言葉で近づいてきた。

「何故お前を引き取ったかわかるか？両親の借金を肩代わりする条件で俺達がお前を買ったんだよ」

借金？

買った？

意味のわからない言葉を出されて困惑する雅美を、叔父はベッドに強引に押し倒してそのまま犯してしまったのだ。

雅美が中学2年生。

1番敏感な思春期の頃だった。

——ガチャ。

マンションに着いたのはあれから15分後。

家の中は明かりが消され、シーンと静寂に包まれている。

雅美は物音立てずに廊下を歩くとそのまま自分の部屋に直行した。

食事は店の賄いが出るため、後は風呂に入って寝るだけ。

部屋に入った雅美は電気をつけてバックを小さなテーブルの上に置き、そのままベッドへ倒れ込んだ。

「疲れた……」

毎日立ちっぱなしの仕事はさすがに辛い。

家に帰る頃になると足に重りがついているかのように、歩くのさえしんどくなる。

まだ20代とはいえ、疲労が蓄積されては簡単に休まる事も出来ないのだ。

「よいしょっと……!!」

重たい体を再び起こしてコートを脱ぐ雅美。

そしてベッドから降りてハンガーにかけようとした時、コートのポケットから何かが床へと落ちた。

それに合わせて視線を下にやると、自分の足元に袋に入った飴玉があった。

「そういえば真島さんから貰ったんだっけ……」

雅美の顔に自然と笑みが零れる。

そして体を曲げて飴玉を取ると、袋を開けてそのまま口の中へほおりこんだ。

真島はいつも店を出る間際に飴玉をくれる。

“ 仕事頑張ってな。ほい、おだちゃんやで ”

そう言って、

ジャケットのポケットから飴玉一つ出して、私の手の平に置く。

黒い革手袋の感触しか感じ取れないが、真島の気遣いはしっかりと伝わってくる。

だから回りが冷たくあしらっても、

自分だけは絶対に偏見の目で見ないと決めていたのだ。

真島がどんな人間だとしても、心の中までは見透かす事など出来ないのだから。

「今日はイチゴ味だ」

口の中に甘い香りと味が目一杯広がり、雅美は笑みを浮かべる。

疲れた体にはうってつけの薬かもしれない。

——ガチャ。

その時、突然部屋の扉が開いて雅美は咄嗟に後ろへ振り返った。

「おかえり、雅美」

不敵な笑みを浮かべ雅美に声をかけて、室内に入ってきたのは叔父だった。

「もう、寝たんじゃ……」

誰も起きていないと思い込んで、すっかり安堵感でいっぱいになった雅美の顔色が一気に青ざめる。

「何言ってるんだ。俺はお前の帰りを待っていたよ……」

ニヤニヤしながら雅美に近づいてくる叔父に、

雅美は飴玉の存在を忘れ壁に背中をぴったりとつけて息を飲んだ。

その目は完全に脅え、表情すら強張っている。

今日はしなくても済むなと思っていただけに、心構えが出来ていなかったのだ。

「さあ……、今日もたっぷり可愛がってあげるよ」

目と鼻の先まで近づいてきた叔父からは、臭いほどの加齢臭と頭髮剤が漂ってくる。

そしてシワだらけの手が雅美の腕を掴むと、

雅美は体をびくつかせて肩を縮めた。

逃げる事も、

逆らう事も許されない行為。

雅美はこの人間に人生を買われたのだ、あの手を取った瞬間から。

嫌でも脚を開いて、叔父を受け入れなければいけない現実。

快樂など一度も感じた事が無い。

雅美にとってセックスはただの苦痛な行為に過ぎないのだ。

「っ…くっ、はぁっ…！」

華奢な体を玩ぶように自身の欲望を雅美の中に突き刺す叔父。

雅美は叔父に顔を見られないように、自分の顔の上に手を広げ、
歯を食いしばりながら苦痛の表情を浮かべてただ時間が過ぎる事だ
けを待つ。

こんな関係がいつまで続くかなんてもう考え飽きた。

この牢獄のような家にいるかぎり永遠と繰り返されるのだから。

家を出たくても、給料の殆どを叔母にせびられているため貯金もろくにさせてもらえない。

それに家を出たとしても叔父の呪縛は何処までもついてきそうで、不安で仕方ない。

結局、自分はどこにいても逃げる事も離れる事も出来ないのだ。

この手に見えない鎖が繋がれている以上は。

「ああっ……イク！」

叔父が汗を雅美の腹にぽたぽたと垂らしながら激しく腰を振る。

そして漸く動きがぴたりと止まると肩で息をしながら、全てをゴムの中で吐き出して雅美の中から抜き出した。

「じゃ、おやすみ」

優しさもいたわりもない言葉を雅美にかけ、先端に精子がたっぷりたまったゴムをその場に投げ捨て叔父はやっと部屋を後にした。

「……」

暫く呆然として床に落ちたあの汚い異物を広いあげる気力もない雅美は、

知らず知らずのうちに睡魔という奈落の底に落ちていった。

——次の日。

「……」

ちょうど昼時。

1番店が込み合う時間に雅美はただよらぬ気配を感じ、店内の通りが見える窓ガラスを見つめた。

そこには窓ガラスに体全体をべったりくっつけ、雅美を凝視する真島の姿があった。

雅美が右に行けば真島の目が右に動き、左に行けば左に動く。

「ちょっと、どうにかしてよ……！知り合いなんでしょ！？」

その様子を見兼ねた店長が雅美に慌てて歩み寄り、窓ガラスを指差して真島と雅美を交互に見ながら冷や汗をかき慌てふためいている。

店内の客も真島の目線の先にいる雅美を白い目で見つめる始末だ。

雅美は慌ててウェイトレス姿のまま店を出ると、そのまま真島に駆け寄った。

「なっ…何してるんですかっ…！」

「強行手段や」

「はぁ!?!」

真島は雅美の声に耳を貸しながらもガラスに張り付く事を止めようとしない。

「雅美ちゃんにいつつも振られてばかりで俺寂しくてしゃーないわ」

「フラれてって……」

「今日こそは約束取り付けるぞ? 出ないと1日中張り付いとるわ」

まさしく駄々っ子のような感覚。

雅美は大きくため息をついて頭を抱えた。

私達を物珍しそうに見つめる、通りを歩く人々や店内の客からの視線がチクチクと痛い。

店長の焦る姿も嫌というほど目についてしまう。

ここは折れるしかないと観念した雅美はわかりましたと渋々呟いた。

「ホンマか! 俺の執念勝ちや〜!」

「――!」

真島はその言葉を聞いた途端ガラスから素早く離れ、嬉しさのあまりその場の勢いで雅美をきつく抱きしめていた。

「ほんなら、仕事が終わったら飯行こうや！俺ミレニアムタワーの前で待っとるからな！約束やで！？」

真島は雅美の体を離し、すぐ近くにある雅美の顔を見つめながら満面の笑みで話す。

いきなり抱きしめられ、真島の顔が目のある状況に雅美は頬を赤らめ、目がテン状態で返す言葉すら失っている。

「んじゃまた夜に！ほなさいなら」

真島は軽いステップで店から離れていくと雅美に向かって手を左右に激しく振り、何事もなかったかのように人込みの中へ消えて行った。

「ありがとうございました」

本日最後の客を見送った雅美。

空いた皿とコップを片付けトレイに重ねて、厨房へ運ぶ。

その時ふと目に入った店内の掛け時計は夜10時過ぎを差していた。

——真島さん、本当に待ってるのかな……？

たしかにあの時は渋々約束したけれど、
本人は意外とケロッと忘れてるんじゃないだろうか……。

本当は信じたいけど本気にはいけないと思う自分もいる。

たしかに真島とは顔見知りだし、何も知らない間柄じゃない。

くだらない話をして食事するぐらいなら簡単な事だ。

だけど……自分みたいな一般人を相手して楽しんだらどうか。

雅美の頭の中に様々な思惑が混在して、閉店作業にすら手がつかない。

真島という存在がこの先雅美の中でどんなモノに変わっていくかなんて、想像もつかなかった。

「お疲れ様でした」

雅美はそう言って店の裏口から外に出た。

空気が乾き吐く息は白い。

気温がぐっと下がったせいかな、時折吹く風が刃の様に皮膚へ突き刺さる。

昨日同様、結局日付が変わるまで仕事をするはめに。

その間も頭から真島の事が離れなかった。

何時から自分を待っているのだろうか。

もしかしてもうミレニアムタワーの前にいるとか等、気になって仕方ない。

こんなに真島の事を考えてしまうのは、やはりあんな約束をしたせいだとそう自分自身に言い聞かせていた。

だが、心の根底にある大事な思いに気づかないまま。

雅美は半信半疑でミレニアムタワーに行く事にした。

いなかったらいなかったで仕方ないだろう。

単なる口約束でしかなかったんだとか、寒くて帰ったんだとか自分の良いように解釈すればいい。

信じた自分が馬鹿だったなと笑ってやるのもいい。

だが本当は変に期待をして現実真島がいなかったら、内心傷つきそうで恐かったのだ。

傷ついたところで何の見返りもないのに……………。

ハア…。

吐息を手には吹きかけて、冷たい北風ですっかり冷え切った手の平を暖める雅美。

暫く歩くと神室町に高くそびえるミレニウムタワーが見えてきた。

雅美は辺りを見回しながら真島の姿を捜す。

だが、たくさんの人々が通りを歩いているためなかなか見つからない。

一際目立つあんな格好をしても、こんな人混みでは何の意味も持たないなんて。

雅美はタワーの入口前に着くとその場に立ち止まり目を凝らして捜すが、
それらしい人間が全く見えず心の中に不安が一気に侵食し始める。

——やっぱりいないのかな。

半ば諦めかけながら、ふとタワー前にある電話ボックスに視線をやると、

体を丸くし膝を抱え寒そうに地べたに座り込む一人の人物が目に見え
び込んできた。

見覚えのある服雅美は電話ボックスへ慌てて駆け出すと、その人物に声をかけた。

「真島さん！」

名前を呼ばれた真島はゆっくりと顔を上げ、雅美を見上げる。

その表情には笑顔を作る余裕もなく無表情のまま、寒さで凍え今にでも生き絶えそうな凍死寸前の顔をしていた。

「……ここですっと待ってたんですか？」

「6時半から待っててん……、寒すぎやで今日の夜は」

ということはこの冷たい北風の中、6時間もこの場所で待っていたという事になる。

その事実には絶句した雅美に浮かぶ言葉が見つからない。

呆れてものが言えないのか。

それとも執念というのか、全く検討がつかない。

だが、漸く出会えた以上外にいる意味はない。

「どこかお店に入りましょう、真島さんも早く体温めないと……！」

雅美が辺りを見回しながら言うと、真島が手を貸してくれと呟く。

「あまりにも寒くて足が固まってしもうた」

その言葉に雅美が手を差し出すと、真島は雅美の手を掴みそのまま勢いよく引っ張って漸く立ち上がった。

その力に一瞬体が大きくよろめいた雅美。

そして氷のように冷たくなった革手袋の感触が、雅美の胸にぎゅつと強く締め付けていた。

ミレニウムタワーから程近い場所にあるバツカスに、二人はいた。薄暗い店内には数人の客がいて、ダーツを楽しんでいる客もいる。

「お待たせしました」

マスターからカウンター越しに飲み物が出される。

雅美はホットドリンクを真島はアルコールを頼む。

「体はもう大丈夫ですか？」

「もう大丈夫や。こうみえても丈夫な方なんやで？」

カウンター席に肩を並べて座る雅美に、真島がニッと笑いながら話す。

先ほどの硬直した体もアルコールと店の空調で漸く解されてきたようだ。

「まさか……、あの場所に長い時間いるなんて想像もしませんでした」

雅美が申し訳なさそうに呟く。

そんな横顔を真島はグラスを傾け、一口飲みながらじっと見つめている。

「てっきり冗談なのかと思ってたから……。本当すみません」

「何で謝るんや？」

「だってずっと待たせちゃったから……」

「仕事があつたんやから、しゃーないやんか。雅美ちゃんが気にする事やないで」

ハハハと陽気に笑う真島に、雅美の顔にもつい笑みが自然と零れる。

「冗談だと思っても雅美ちゃんはちゃんと来てくれた。俺はそれだけで十分嬉しいわ。そーいう真っ直ぐなところがええねん」

「……」

そう言って真島は笑いながら雅美を見つめると、互いに視線がぶつかった。

真島の熱い視線に頬を赤くする雅美。

胸の奥が一気に熱くなって、どうしても真島から目線が外せない。

心臓がドクンドクンと大きく高鳴り、

すぐ側にいる相手に鼓動が聞こえてしまいそうだった。

言葉ではなく目で何かを訴えるような真島の眼差し。

それは雅美の心に直接問いかけるような、不思議な感覚だったのだ。

「……頬っぺた赤いで」

ニヤリと笑って雅美の頬に手を沿える真島。

何だか軽く玩ばれてるような気分陥った雅美は、そんな事なんですと恥ずかしがりながら、真島から視線を外してホットドリンクを一口飲んだ。

「まっ真島さんの事だから、色んな女性に同じ様な事言ってるんじゃないんですか？」

一人動揺を隠せない雅美に真島の鋭い視線が突き刺さる。

「んなワケないやん。俺、そない人間に見えるんかい」

「だって……たくさん遊んでそうだし」

雅美が小声で言うと、何言うてんねん！と厳しいツツコミがきた。

「何で好きでもない女に、そないな事言わなあかんのや。そこまで俺廃れてないわ」

少しぶすくれた口調でグラスを傾け、アルコールを一口飲む真島。

その不機嫌そうな表情に雅美は自分の言った事を後悔をしたと同時に、真島の言った一言が頭の中を駆け巡る。

——好きでもない女に——

決して聞き流してはいけないフレーズに、雅美は思わず我に返った。たしかに真島の言動で自分に気があるのは、嫌でもわかる。

いくら鈍感な人間でも直接的な言葉を目の前で言われたら気づかずにはいられないだろう。

自惚れと言われたらそれまでかもしれないが、真島の態度は明らかに……。

再びあの高鳴りが雅美の胸の中を支配して、顔が一気にほてっていくのがわかる。

「——俺、本気やで」

その一際低い声がすぐ隣から聞こえてきた。

雅美は真島の顔を見ることが出来ず、コップをぎゅっと両手で握りしめた。

でも隣からは痛い程の視線が直に感じる。

雅美はゆっくりと視線を隣に移すと、真島の鋭い切れ長の瞳が自分に向けられていて、その瞳はいつになく真剣に見えた。

ドキンと一際大きく心臓が跳びはね、体温が更に1度上昇する。

息をすることすら忘れて真島を見つめる雅美に、真島が小さく口を開いてこう言った。

「本気で……雅美ちゃんの事好きや」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3040n/>

初恋

2010年10月13日16時01分発行